

# 景観フォーラム

## 巻頭言

あけましておめでとうございます。2020年第二回目の東京オリンピックの年になりました。前回は1964年ですから56年前という半世紀以上前のビックイベントです。このイベントは戦後19年目にして第2次世界大戦後によって日本中が壊滅的爆撃を受けてからの奇跡的復興を世界に証明することを意図しておりました。20年も経たずして、復興を成し遂げるということは、生活基盤を復興させるために教育・文化・芸術という所謂マルクスの言う上部構造は後回しにされました。そしてほぼ半世紀後、この度のオリンピックはこの上部構造を世界に提示することでしょう。

この状況はあの明治維新の時に大変酷似していると言えます。江戸時代を徹底的に否定して、欧米に何とか追いつけというもの。そして、GDPが世界一になり、即ち国家としての世界一の金持ちとなりました。しかし、国民はその豊かさというものが一向に享受できません。何故でしょう。それはまさに量の追求でした。生活の豊かさは生活の質QOL (quality of life) の追求なくして感じられるものではありません。痛勤電車はまだまだ健在ですし、過労死も一向に解決されておられません。世界でも最も苦痛を伴う日本の激しい夏に長期休暇はタブーのひとつです。何せ勤勉こそ人生の目標という金言は戦後70年も普遍的価値を保ち続けております。しかし、一人当たりのGDPはなんと世界第26位ですから、豊かさなど感じられはるすもありませんし、数字がよく証明しております。

そして日本の景観はどうなったでしょうか。生き方は均質なものを追求しておきながら、都市景観はバラバラで美を追求したかけらもありません。戦後70年間、景観美を追求するような余裕がなかったのです、という返答はよく聞かれますが、個人住宅の個々の美しさは維持されているし、日本間にある床の間はきれいな生け花で飾られております。しかし全体の都市景観は統一性がなく、都市計画によって街並みが作られてきたという感じは一向に感ぜられません。

この日本人という人種は日本の都市を見るときには、個々の家は見えても街並みは彼の眼球には届いてなかったのではないかと、想像したくなります。そしてこの国民は老若男女常に真新しいものを追い求め、前の時代のことをすぐに忘却し、挙句の果ては徹底的に否定して、したり顔などしている次第です。過去を鑑みない者に良き景観への思いは生まれるわけはありません。景観こそ歴史を温める行為そのものだからです。

NPO法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

### <日本景観フォーラム2019年度年間スケジュール>

\*2019年度とは2019年4月1日⇒2020年3月31日のことです。

#### 2019年

- 4月25日(木) 第1回理事会・総会 於JICA研究所
- 5月21日(火) **第1回景観研究会(東京の景観)** 於JICA研究所
- 6月30日(土) **第1回景観まちあるき(東京都内:谷中)**
- 7月23日(火) **第2回景観研究会(東京の景観まちづくり)** 於JICA研究所
- 8月 夏休み(景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9月24日(火) **第3回景観研究会**: (東京・深川の景観)
- 10月6日(日) **第2回景観まちあるき** (東京・深川)
- 11月19日(火) 第2回理事会・**第4回景観研究会** 於JICA研究所
- 12月17日(火) 忘年会(四谷の居酒屋)

#### 2020年

- 2月2日(日) **第3回景観まちあるき**: 丸の内
- 2月18日(火) **第5回景観研究会**: 丸の内 於JICA研究所
- 3月28日(土) **第4回景観まちあるき** (未定)

★以上の年間スケジュールは第一回理事会の承認の上実施されます。

## 深川そぞろ歩き記（景観フォーラムまち歩き）

日本景観フォーラムは、10月6日に東京都江東区の深川でまち歩きを行いました。参加メンバーは、6人。地下鉄清澄白河駅を降りてすぐの清澄3丁目交差点で待ち合わせして、まず北西方向の芭蕉記念館へ向かいました。俳人松尾芭蕉が江戸で暮らしていたのが深川で、有名な奥の細道の出発点でもあることから、江東区が38年前に開館しました。記念館というと当時の面影を彷彿とさせるような茅葺とか瓦の屋根の民家風建物を想像するのですが、これは全く普通の鉄筋3階建てのビル。横に和風の庭が申し訳程度に添えてあります。内部には芭蕉ほか俳句文学の資料を納めてあるので、記念館というよりは資料館という名称のほうが相応しいと思いました。

記念館の近くには、隅田川を眺められる場所に芭蕉の銅像が置かれた庭園が造られているほか、実際に

芭蕉庵があった場所の近くに芭蕉稲荷神社も建てられています。いま全国的に芭蕉の奥の細道のルートを巡るツアーが人気で、ルートに掛かる自治体では観光客を呼び込むための史跡の掘り起こしも行われ、ツアースポットとして整備されているようですが、その出発点としては、少し物足りなさも感じます。

隅田川に合流する小名木川にかかる萬年橋を渡り、いったん出発点の清澄3丁目に戻ってから西の方角に進路を変え、300メートルほどのところにある深川江戸資料館に入館しました。江戸深川に関する歴史・民俗の展示やイベントを行っているのですが、館内には江戸時代の深川の町並みが復元されているので、江戸と現代をを景観の上で比較するのに役立ちます。船宿や掘割を見下ろすように建つ火の見やぐらなどは深川の伝統的風景といってよいでしょう。

次に向かったのは、清澄庭園です。この庭園は、江戸時代の商人・紀伊國屋文左衛門の屋敷があったところだそうです。紀伊國屋文左衛門については、元禄時代にたいへんな豪商だったということくらいしか知りませんでしたが、庭園の規模は想像以上です。邸地は明治になって三菱財閥創業者の岩崎弥太郎が買い取り、庭園の造成を行った結果、回遊式築山林泉庭園という全国的にも誇れる庭園なったということです。ここの特徴は、庭園のかなりの部分を占める大池で、隅田川の水を引き込むなど大掛かりな工事を行ったといえます。池に浮かぶように建っている数寄屋造りの建物は集会場として利用可能なので、桜の季節などに合わせてそこでこのフォーラムの集会などをやってはどうかという意見も参加者から出ました。



庭園を出た後は、仙台堀川を渡り、芭蕉俳句の散歩道を通り、門前仲町駅の方に向かいました。途中には小津安二郎の生誕地や伊能忠敬の住居跡などがありますが、標識だけなので、確認だけして通り過ぎました。この時点までほとんど歩き続け、皆さま喉も乾き、喫茶店などで休憩を取りたいところでしたので、門前仲町駅近くの東京深川モダン館でお茶にすることにしました。1階のロビーには、休憩スペースが備わり、受付カウンターの隅ではセルフサービスのコーヒーマーカーもあり、100円でコーヒーが飲めるというので、喜び勇んで飛びつきました。この建物は一見最近の建築物に見えますが、昭和7年に東京市営の食堂として建築されたモダン建築で、平成20年に国登録有形文化財として指定されております。ロビーの壁には、深川地域の歴史的建造物が紹介されていたので、眺めていましたら、築86年の現役アパートの写真が紹介されていて、「あ、これ見逃した」とここでようやく気が付きました。当時は先端技術を使ったモダンな建物ですが、いまだに現役で、しかも今ならむしろレトロなムードがかえって魅力になっているのがすごいいと感じました。1階にはギャラリーや喫茶店もあったようなので、ここに入るべきでした。以上でまち歩き終了です。あとは恒例の飲み会。本当は、まるで映画のセットのような古い飲み屋街の辰巳新道がよいのですが、ここは日曜日は全店一斉休みなので、仕方なく通りから眺めただけでスルー。大衆酒場の斎藤商店にしました。この居酒屋は「さいとう」という名前の方が一人でもいるとお会計は10%割引というキャンペーンも時期によってはやっているようなのですが、この日は残念ながら対象外。しかし、深川はまだ見ていないところがたくさんあり、第2部もできそうなので、「次期ご期待」ということにいたしましょう。(豊村泰彦)



## &lt;LFJブックレビュー 66&gt;

## 『道路の日本史』 武部健一著 中公新書 2015年刊

“道”（ドウ）とは頭を向けて進んでゆくみち、ある方向にのびるみちのことであり、“路”（ロ）とは太いみちをつなぐ横みち、連絡のみちということの意味であり、即ち「道路」とは人や車両の交通のために設けた地上の通路、みち、往来のことである。そして、この道という言葉は、道徳という言葉にあるごとく、道を踏み外してはいけないというモラルを提唱する意味での言葉として定着している。

道路を主役として日本の歴史を語るというのが本書の趣旨であるが、日本の道路史に入る前に、先ず日本の道路が世界の道路と比較してどういうところが異なっているかという比較文化論を論ずる。ローマの主要幹線道路は12メートルの道幅があり、アッピア街道の目的は、第一に軍隊の輸送、第二に政府役人の公用旅行、第三に生産物の輸送交流、第四に民間人の旅行としている。片や紀元前の中国では秦の始皇帝が全国にわたる道路システムを建設し、その道幅は11.5メートルあったという。その東西を西域のシルクロードがユーラシア大陸を結ぶ国際的な大幹線道路として登場する。日本に直接影響を与えたのは中国の三国時代と隋唐の道と橋建設であるという。それは中国に仏教を学ぶために留学した僧たちによってもたらされた。そして、ヨーロッパの道を本格的に造り出したのはかのナポレオンであったという。やはり、近代になってからであった。

日本の道路建設の始まりは、まさに国家建設と連動している。国家がまだ弱体な時期の三世紀前半のころ日本にきた中国人が日本の事情を『魏志倭人伝』に「土地は山険しく深林多く、道路は禽鹿の如し」と書いている。この頃の日本には今でいう道路たるものはなく、基本的に獣道が通常であったということか。道路らしきものができたのは律令制が整い、奈良時代を中心に全国に7道駅路という道路運用の制度を備えた道路網を持った。『日本書紀』には仁徳天皇十四年に日本道路史上、最初に現れた直線道路の記述がある。そして『万葉集』には平城京の街角の街路樹が繁茂している様子が詠まれている。律令制度下のこの国には北海道を除く全国レベルに七道駅路と称する道路ネットワークが確立していた。古代道路の構造は道幅が12メートルあったものが平安時代には9メートルになり、さらに6メートルまで縮小されたという。この道路建設にあたってのプロフェッショナルは、渡来した百済人が寄与したものとされている。さて中世に入ってから道路建設は鎌倉幕府の軍事活用が中心であった。主に東海道の活用が重要であり、その道路事情は『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』などの個人的な旅行の日記から推し量ることが出来る。

江戸時代の道路活用はこれまでのものを踏襲したが、明治になり近代国家の建設と共に急速に実施されたのは鉄道建設であり、道路建設は若干二の次にされたの感がある。むしろ日本の近代道路建設は戦後の高速道路が中心的な存在となったのである。そのため道路とともにある人間のための歩道がないがしろにされてきたのである。（斉藤全彦）



## 天地玄黄 NO.22 「区のワークショップに参加して」

日本景観フォーラム 理事 野田路人

今年の8月、東京都在住により区からワークショップ開催と参加者募集の案内の手紙が送られてきました。内容は、区の令和3年度から10年度を期間とする新たな新基本計画策定に向け、区民に区の目指す姿を話し合ってもらい、その中から上げられた意見を計画策定の参考とするため、ワークショップの参加者を募集、区内在住の15歳以上を対象に無作為で抽出された8,000名宛に手紙を送付したとの事でした。

今まで、区の未来や目指す姿など殆ど考えたことも無く、何をどのように進めるのか全く見当もつきませんでした。あまり出来ない経験と思い、ダメもとで申し込み用紙を返送してみました。8,000名のうちの位の方が申し込みしたか定かではありませんが、約一か月後「当選」の手紙を受領し、びっくりしました。

当選者の約180名は3グループに分かれ、各グループ60名がそれぞれ異なる曜日に各2回集合会場の会議室に集まることで、参加する土曜日グループの第一回目は11月15日(土)となりました。

興味深々の会議の進め方は・・・一回目は、「ワールドカフェ方式」で広く区民から各施策のあるべき姿(目指す姿)の意見を集めるための会議で、まず会議室の入口で6人掛けテーブルの空いている席に腰掛ける様指示を受け、適当な席に座ることからスタート。

お互い年齢も違う初対面同士、全く会話は無く、胸に付けた名札を見る程度の中、進行役の指示に従い順に1分間の自己紹介から始まり、担当部署の区の企画経営部企画課の担当者より、「今年の年末までにワークショップを実施し、その意見を反映しながら施策体系検討、骨子案検討、素子案検討、来年11月にパブリックコメント・区民説明会実施、最終案検討、令和2年度3月に新基本計画策定」との大きな策定の流れのスケジュールと区の現状として簡単な人口動態、財務状況の説明を受け、ワークショップの意味を自分なりに理解しました。(人口動態に興味深かったのは、人口増加しており5年間で日本人は3%増に対し外国人は30%の伸び率との事で、確かに外国人が増えていることを再認識しました。)

次に、各テーブルに置かれた模造紙の中央に大きく「区の未来」と書き、「区の魅力・特長」についてそれぞれが思うことをマジックで書き込みました。司会者より「座った椅子の背にマークのある方は、そのテーブルのホストです。テーブルのメンバーの方は書き込んだ内容を順に説明してください。」との事で振り返るもマークは無し、チョット緊張するホストを中心に順に自分の意見を手短かに説明。終了後に各テーブルはホストの方を残し、メンバーは同じテーブルの方とかち合わない別のテーブルに移動して休憩タイムとなりました。

休憩後、新しいテーブルのホストから今までどんな話が出たか説明を受けました。多くは似たような意見と共に、全くでなかった新しい意見を聞き、改めて色々な意見が有ると感じました。一通り説明を聞き終わると、今度は「他のまちに無い、この地のらしさは何か？」をテーマで意見交換をしました。

意見交換後又最初のテーブルに戻り3つ目のテーマ「10年後の区はどんなまちになってほしいか？」について意見交換を行い、最も印象に残った意見を2枚付箋に書きだし、計画に位置付けられた大綱(①子育て・教育、②健康・福祉、③都市基盤、④産業、⑤地域力、⑥環境)別に模造紙に付箋を貼り付け、全体で意見共有を行い、この日は終了。

12月14日(土)の二回目の会議は、「グループワーク形式」で大綱の6分野の課題を抽出するため、割り当てられた各担当分野で課題の掘り下げを行う事で、まずは前回(一回目)の「意見のまとめ」の説明を区の担当者から受けることからスタート。(各曜日の3グループでばらつきはありますが、③都市基盤と⑤地域力への意見が多く、続いて⑥環境、①子育て・教育などに意見が多く出たとの事でした。)

座ったテーブルの6人で順に自分で担当分野を選び、各分野のテーブルに移動、参加者も前回の一回目と異なり移動もスムーズ。司会者の指示で担当分野について各自意見を付箋に書き込み、テーブルの模造紙に貼り意見交換をしました。出た意見をテーブルメンバーで整理し、その中でも重要となる項目をメンバー全員で2

つ選び、印をつけ、これで会議は終了。最後にワークショップ参加に関するアンケートに「今回出た意見が少しでも区の計画策定に反映して欲しい、10年刻みの計画策定ではなく、もっと長期的な目標を定めての計画をして実現化して欲しい。」と記入したものを提出し、会場から退出して全て終了となりました。

今回ワークショップに参加して、多数の意見を抽出し、纏める進め方の手法を実際に経験したことはこれからの活動に大いに役立つと感じました。後から知りましたが、この手法はかなり前から多くの市町村などで住人の意見をまとめたり、会社での年次、中長期計画策定などでも使われているとの事です。

今回、今までほとんど行ったことのない地区からの方、すぐ近くのご近所らしい方、長年住んでいる方、引越して来てから日の浅い方、老後の生活者、働きながらの子育て真最中の方など千差万別の参加者から聞く話は、改めて住んでいる周りの事を色々知り、考える機会ともなりました。又、自分の身近な周りの事はご存知でも、区の他の地域の事はほとんどご存じ無い方が想像以上に多いことにも驚きました。

私たちが意識して取り組んでいる「景観」というキーワードも出ましたが、言葉では「良い景観を残したい」とか「あの風景は我がまちの誇り」などの意見は出ますが、あまり掘り下げて考えている方は少ない様に感じました。これからは各自がもっと自分の周りに大きく目を配り、その変化を改めて見直すきっかけを作ることからスタートすることが必要と強く感じた次第です。

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : [info@keikan-forum.com](mailto:info@keikan-forum.com)

URL : <https://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan